

故郷の大田原では2月の寒い朝、霜柱がよきよきと地面に顔を出す。小学生の頃は、この霜柱を踏み付けるのが快感だった。私は大学院で土の研究を始め、シベリアの永久凍土調査にも行った。今では霜柱が関東ローム土の冷え方と土の中での水の動きの微妙なバランスで成長することを知っている。

2011年の東京電力福島第1原発事故で放射性セシウムが本県北部などにも拡散した。セシウムは土壌中の粘土成分に強く吸着し、雨が降っても地表面にへばりついたまま動かない。そのため汚染された地域の放射線量は下

「日本一美しい村」にも選ばれた飯舘村には4月に避難指

示が出ていた。8月末の日曜日、都内の70代で構成するNPO法人「ふくしま再生の会」に出会った。彼らは毎週末、村の農家の菅野宗夫さん宅に集合し、村内のあちこちの放射線量を測り、山林や農地の除染の方法を探していた。

冬は寒くて土が凍ると聞き、私は凍土の性質を利用すれば除染できると直感し、12年1月にNPOと一緒に凍土剥ぎ取り除染法を編み出した。その春にはセシウムを含む表土を泥水にし、田んぼに掘った穴に流して埋める除染法も試した。国もまだ除染方法を決

学会など、村の復興支援の活動が続けてきた。村民は村に帰ってくるはずだった。しかし実際は一部の高齢者のみで、若者は戻っていない。また、環境省の基準では田んぼのあぜは除染されず、肥沃な表土が削られて地力が落ち、重機で地下の排水

真の復興、飯舘村民に学ぶ

「子は親の背を見て育つ」と言うけれど、村の復興は「孫がじじばばの背を見て育つ」ことにヒントがあると思った。

めかねていた頃である。

溝がつぶれて土の排水性が悪くなってしまう。農地の修

毎年、3月になると新聞やテレビが東日本大震災の特集を組む。東京五輪に舞い上が

その後、国は村内の空間線量率を下げるために農地の地表面を約10センチ削る除染工事を

実施し、17年3月末に一部の地区を除いて村民への避難指示を解除した。その間、私たちは帰村後の生活を考え、農業再生のための現地実験や見

が息子や孫との3世代で、昨年10月の台風で被害を受けたビニールハウスの解体作業を

今年、3月になると新聞やテレビが東日本大震災の特集を組む。東京五輪に舞い上が

ミは、マイナス状態からようやくゼロの地点まで戻った現

（東京大大学院農学生命科学研究科教授）



ま動かない。そのため汚染された地域の放射線量は下

11月、宗夫さんから「村の

業再生のための現地実験や見

が息子や孫との3世代で、昨年10月の台風で被害を受けた

（東京大大学院農学生命科学研究科教授）